公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会
Shanti Volunteer Assoc.

令和４年８月３日からの大雨による災害支援　最終報告書

2022 年8月１日から6日にかけて、日本海から東北地方・北陸地方に伸びる前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となり、北海道地方や東北地方及び北陸地方を中心に大雨となりました。その後も、13日に伊豆半島を上陸した台風第8号の影響で東日本太平洋側を中心とした大雨をもたらすまで断続的な雨が続きました。このうち、3日から4日かけて、日本海側からのびる前線が停滞し、大気の状況が非常に不安定になった影響から、新潟県では県北地域を中心に降水量が統計開始以来も極値を更新するなど、記録的な大雨になりました。その影響で、新潟県と山形県では、堤防決壊や越水・溢水による反乱及び内水等による甚大な浸水被害と土砂災害が発生しました。

浸水被害を受けた家屋は、停電や断水の影響に加えて浸水でエアコンが壊れて使えなくなったりするなど、自宅で生活することが困難で避難生活を余儀なくされる被災者も多くいました、

また、発災直後は新型コロナウイルス感染症の影響で一般ボランティアの受け入れも限定され、全国各地で大雨による被害が発生したことからボランティアの人手不足や復旧作業に時間がかかることが予想されました。

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（以下シャンティ）は、緊急人道支援に取り組むため、2022年８月 10 日より新潟県村上市にスタッフを派遣し調査を開始しました。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止策として、社会福祉法人村上市社会福祉協議会(以下社協)のガイドラインに従い活動を実施しました。

初動調査

発災から1週間後の8月10日から17日、8月26日から30日の2度にわたり初動調査として職員を派遣。平時からつながりのある団体や災害ボランティアセンターからの紹介を通じて山形県置賜地区、新潟県下越地方を中心に調査を行いました。

山形県では、1,671 棟が建物被害を受けており、特に被害の大きかった置賜地区に向かいました。初動調査では、飯豊町災害ボランティアセンターで活動するチーム置賜に同行させていただき、被災宅の復旧作業をお手伝いさせていただきながら、被災に合われた方の当時の状況をお聞かせいただきました。チーム置賜とは、東日本大震災をきっかけに発足した置賜地区の曹洞宗僧侶によるボランティアチームです。これまで宮城県石巻市の小学校への支援や慰霊法要など東北を中心に 10 年以上活動し、今回の水害では被災宅の泥出しや清掃作業を行っています。

被災当時の状況をお聞きする

山形県で活動を行うチーム置賜

飯豊町では牧畜や農家が盛んで、高齢者世帯も多く住んでいることから被災した住居だけでなく、納屋や被災宅周辺の片づけ作業も必要とされていました。80 歳女性が「雨が恐ろしいほど降り続き、玄関前は川のようになっていた。高齢者二人暮らしでボランティアが来てくれなかったらとても土砂の除去はできなかった。」と話してくれました。

新潟県では、2,431 棟が建物被害を受け、関川村と村上市が被害件数のほとんどを占めていました。村上市では 184 件の土砂災害が発生し、ある地域では集落全体が土砂に飲み込まれ、その被害の大きさを目の当たりにしました。ボランティアセンターでは、一般ボランティアだけでなくボランティアセンターを運営する人手も不足しており、家屋修繕の活動以外にも福祉的な目線で行うボランティア活動も必要となってくるという指摘もありました。しかし、ひと月の間で全国各地に大雨による被害発生したことにより、深刻な被災状況へのマスコミ報道は少なく、被害の全容は外部には伝わらないままでした。また、内水氾濫により浸水した地域は水が引いた後は、家の外側を見るだけでは被害状況の把握は難しく、多面的な視点で支援が求められていました。

2度の調査では、小学校や保育園など公的な場所から放課後等デイサービスやコミュニティカフェなど民間の子どもに関わる施設を訪問しました。そこで分かったことは、水害によって学ぶ場所、遊ぶ場所、住む場所が変わってしまった子どもが多くいることです。保護者や先生・支援者からは、被災後の環境の変化によるストレスを心配する声も多く聞きました。

そこで、平時から現地で子どもの居場所づくりに取り組む、任意団体「ふくちゃ部」の活動に協力する形での子ども支援や、被災した子ども施設や居場所への蔵書支援や備品整備を実施しました。

子どもの居場所への備品と蔵書支援

・コミュニティカフェ「ふくちゃカフェ」

村上市荒川地区で発達が気になる子どもとその家族のために活動している「ふくちゃ部」。管理栄養士の資格を持つふくちゃ部代表の冨田さんと保健士が経営する「ふくちゃカフェ」は家庭でも学校・職場でもない「第 3 の居場所」としてのコミュニティカフェです。障がいの有無等関わらず相談できる窓口や、発達障がいに関する各種書籍・DVD 等も備えてあり子どもも大人もほっと一息つける空間として利用されてきました。

冨田さんは自宅や経営する「ふくちゃカフェ」が浸水する被害を受けました。その結果、ふくちゃカフェは復旧作業のため約 3 か月間通常営業を休止しなければならない状況となりました。絵本や発達障がいの専門書など子どもから大人まで利用していた約 500 冊の書籍がすべて被害に遭いました。カフェの再開にあたり、安心できる空間には本が必要との声から蔵書支援を行いました。

被災した保育園への備品支援

・保内学童保育所

村上市にある保内学童保育所は約 90cm の床上浸水の被害を受け学童施設の利用ができなくなり、隣の保内小学校の教室を借り活動を続けていました。学童の登録者は90人近くおり、平日は約50人、土曜日は約10人程度の子ども達が放課後の居場所として利用しています。2023年5月から元の学童施設で活動を再開するため準備を進めていましたが、約400冊の書籍が水に浸かっていました。床上床下浸水併せて生徒の約 3 分の 1 が被災した保内小学校の子ども達が一人でゆっくり時間を過ごし、心のケアと学びを届けるため蔵書支援を行いました。

・あらかわ保育園

園児 184 名 10 クラス。

8 月 4 日午前 2 時頃、市役所から明日は休園するよう連絡がありました。施設の浸水は午前 3 時から 6 時までの約 3 時間。床上 30cm ほど浸水したことで遊具や絵本、子どもの荷物などの被害を受けました。

施設の復旧作業の見通しも立たないことから8日から近くの保育園3か所に園児を分散させて、通わせる対応を行いました。受け入れを行う施設の負担を少なくさせるため3か所に分散させての対応を行ったが、それでも園児が増えたことで備品が足りなくなっていたり、あらかわ保育園再開に向けての備品を整える必要がありました。

特に、複数の子どもと散歩する際に必要とされる避難車の数が足りず、子どもと外に出る機会を増やしたいという声が多くあり、それらのニーズに応えるために備品の支援を行いました。

蔵書支援
ふくちゃカフェ：202 冊
保内学童保育所：161 冊
荒川中学校校内カフェ：31冊
備品整備
あらかわ保育園：ベビースケールとお散歩カート

子どものあそび場支援

・つどい場「あら、ほっ」

現地まちづくり協議会の拠点施設であるつどい場「あら、ほっ」においても、ふくちゃ部は、8 月 8 日からどんな子どもでも受け入れることもできる居場所作りを開始しました。8 月中の夏休み期間は外部支援団体が協力しながら毎日あそび場を開いていましたが、発災からひと月が経ち外部支援団体からの支援が少なくなっていく中で継続した支援を地元主体で考えていく必要がありました。シャンティとして主に外遊びをサポートするためプレーワーカーズと共に活動に協力しました。具体的には 9 月 10 日から 10 月 9 日の間毎週日曜日のあそび場全 5 回スタッフを派遣し、その後は長期的な活動として月 1 回と頻度を減らし、地元主体の活動を目指すということになりました。

お手製ウォータースライダーで水遊び

水遊びの後は焚火であったまる

「あそび場がどのように展開されるのか、その必要性を実感することができた」

「被災のストレスを言語化することが難しい子どもたちにとって、外遊びを通して解放される重要性を感じることができたし、子どもを預ける親からも喜んでいただけた」

外遊びを推進するプレーワーカーとの活動は被災した子どもたちの心を解放させ、ストレスケアにつながると共に、それを見る親からも泥遊びや焚火、木工遊びなど普段させてあげることもできない遊びを提供することができたとふくちゃ部から言葉を頂きました。

被災直後は、環境の変化によるストレスを感じ、感情的になったりする子ども達もいたという話をお聞きして、「あら、ほっ」を訪れる度、子ども達の様子の変化を逃さないように心がけて活動を行いました。

はじめは涼しい室内で遊んでいる子も多かったですが、にぎやかな声につられて結局ほとんどの子ども達が外遊びに参加していました。水害で怖い思いをした記憶が、あそび場で行った水遊びの楽しい思い出に上書きされたらいいなと願っております。

・講習会「遊びってなんだろう？」

「これまで子どもの遊び場を確保するということが目的だったけれど、これからは居場所に学びの要素を入れていきたい。」

「インクルージョン理念の理解共有はふくちゃ部の活動する目的の一つで、子ども達と一緒に考えることのできる機会があったらいい。」

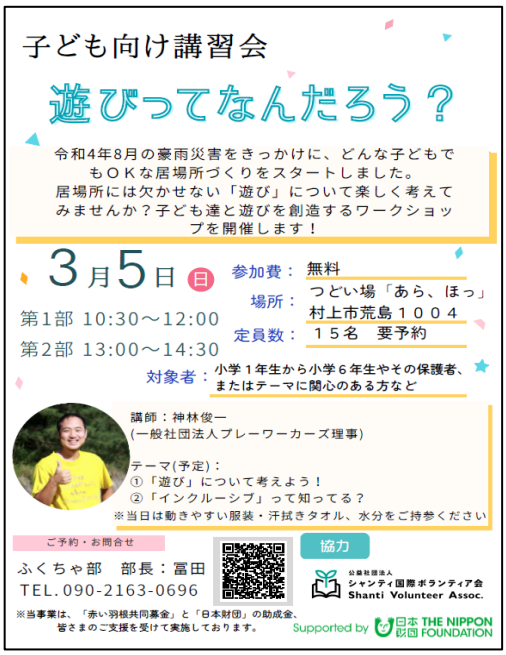
子どもの居場所作りを被災後、続けてきた中でこのような声があり、この居場所であそび場が長く続き、地元の人たちが関わり続けてくれるようになることを目的に講習会を企画しました。

テーマ:遊びってなんだろう？
実施日:3 月 5 日(日)
講師:神林俊一氏 (一社)プレーワーカーズ

講習会の参加者には児童館のスタッフやあそび場を自分の地域でも開きたいという夫婦も参加いただきました。内容としては講師 神林俊一氏の南相馬市であそび場を開いた経験を基に被災地での子どもの遊び場の事例紹介と「遊びってなんだろう？」という今の子どもの置かれているあそぶ環境についてお話しいただきました。

今回の講習会に参加してくださった方々のように災害支援を通してあそび場に関心のある人が生まれ、その人達がつながる場となったことが一番の成果だと感じています。午後からは外でのワークショップを交えつつ、実際に「あそび場を開くためには」というテーマで全国のあそび場の事例を紹介いただきました。

今回の活動をきっかけに平時のあそび場や子ども達が遊ぶ環境が見直され、被災前よりも子どもにとってより良い環境が整えられ始めているという一端を見ることができたように思います。



講習会チラシ

講習会の様子

あそび場
実施回数:7 回(講習会を含む)
参加者:延べ 155 人

最後に

あそび場の参加者の中でも未だ家の修復が完了していない家庭もあります。半年が経過した今だからこそサポートを必要としている人たちもいるように感じます。ハード面だけでなく、目で見ることのできないソフト面の支援は長く関わることが求められると改めて気づきました。新年度になってようやく元の場所で活動を再開する子ども施設もあり、被災の報道から復旧までには本当に時間がかかります。令和 4 年 8 月豪雨により被災された方々へ心よりお見舞い申し上げると共に1日も早い復旧をお祈り申し上げます。

今回新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、派遣職員は、PCR 検査で陰性を確認したうえで活動しました。

事業実施期間

2022年8月10日～2023年3月31日

会計報告

【収入】(順不同)

項目	金額(円)
日本財団からの助成金	1,000,000
中央共同募金会	373,911
日本テーラワーダ仏教協会	1,000,000
ご寄付	90,000
合計	2,463,911

【費用】

	項目	金額(円)
現地事業実施経費	旅費交通費	567,292
	活動費	884,325
	雑費	6,761
	職員(派遣スタッフ)人件費	595,000
	一般管理費	410,533
	費用総額	2,463,911

＊当事業は、主に、「日本財団」様、「中央共同募金会」様からの助成金と「日本テーラワーダ仏教協会」と皆様のご支援を受けて実施しました。

発行日:2023年4月17日

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会
Shanti Volunteer Assoc.

公益社団法人　シャンティ国際ボランティア会
地球市民事業課
東京都新宿区大京町 31　慈母会館 2, 3 階
TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220
URL https://sva.or.jp/